



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代の北海道・千島・樺太における海ワシの記録の分布および生息状況
Author(s)	池田, 圭吾
Citation	北方人文研究, 18, 67-89
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94482
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_05_67-89_Ikeda.pdf



江戸時代の北海道・千島・樺太における海ワシの記録の分布 および生息状況

池田圭吾
(北海道大学大学院文学院)

要旨

本稿では、江戸時代の歴史資料を用いて、当時の北海道・千島・樺太における海ワシの記録の分布および生息状況を明らかにすることを目的とした。

江戸時代の博物誌・矢羽・北海道に関する史料に記録されたワシの名称と現在の種の対応関係を明らかにし、その結果に基づいて、オジロワシ・オオワシ（以下、海ワシ）の生息記録という観点から記録の整理を行った。その結果、江戸時代において海ワシは日本海・太平洋・オホーツク海側の地域に幅広く生息していたが、なかでも北海道東部や千島に多く生息していたと推測された。特に道東の内陸部の河川には多数の海ワシが越冬し、オジロワシは現在よりも多くの個体が越冬していたと推測される。これは、自然状態における海ワシの長期的かつ安定的な存続のために道東の河川に遡上するサケを増やすことが極めて重要であることを意味している。しかし、道東の根室場所では、1850年代に入るとオジロワシの狩猟数の減少がみられ、海ワシの餌となるサケの遡上数が乱獲によって減少したことがオジロワシの減少の一因である可能性を指摘した。また、ワシの狩猟数全体に占めるオオワシの割合は、道東よりも択捉島の方が高かった。越冬期の択捉島におけるオジロワシ・オオワシの割合や、島内の生息場所は、江戸時代と近年の記録では大きな変化はみられなかった。このことから、択捉島では海ワシにとって良好な自然状態が一定程度維持されている可能性が高いと推察された。

本稿で明らかにした江戸時代における海ワシの生息状況は、今後海ワシを保全するために目指すべき「自然状態」を適切に設定するための歴史的背景として有用である。今後は、明治時代以降の分布の変遷を明らかにすることが求められる。

1. はじめに

ワシとは、猛禽類のタカ目タカ科のうち比較的大きいものを指す名称であり、同じくタカ科で比較的小さいものを指す名称であるタカとの間に明確な分類はない(森岡ほか 1995:424)。本稿では、Lerner & Mindell (2005) によるタカ科の分類を採用し、ワシの名を冠するヒゲワシ亜科 Gypaetinae、ハゲワシ亜科 Aegypiinae、チュウヒワシ亜科 Circaetinae、イヌワシ亜科 Aquilinae、ウミワシ亜科 Haliaeetinae、オウギワシ亜科 Harpiinae をワシとして扱う。日本においては、これまでに9種のワシが記録されているが、迷鳥として渡来する4種を除くと、日本で留鳥あるいは冬鳥として見られるのはオジロワシ *Haliaeetus albicilla*、オオワシ *H. pelagicus*、カンムリワシ *Spilornis cheela*、イヌワシ *Aquila chrysaetos*、クマタカ *Nisaetus nipalensis* の5種である(日本鳥学会 2012:198-206)。

北海道では現在、オジロワシが冬鳥としてロシア極東地域から渡ってくるほか、一部の個体は留

鳥として道内で繁殖している（森岡ほか 1995：52-64、白木 1999：135-136）。オオワシもロシア極東で繁殖し主に北海道東部で越冬する（森岡ほか 1995：68-79、中川 1999：186-189）。北海道は海ワシと呼ばれるオジロワシとオオワシにとって重要な越冬地であり、環境省により保護増殖のための取組みが行われている。したがって本稿では海ワシに焦点を当て、保全を適切に行うための歴史的な生息情報として、江戸時代の北海道における海ワシの分布や生息状況を明らかにすることを目的とする。なお、北海道にはごく稀な夏鳥または留鳥としてイヌワシが渡来し、山地の森林には個体数は少ないがクマタカが生息する（藤巻 2012：22）。イヌワシとクマタカは本稿の主要な研究対象ではないが、歴史資料に記載されたワシの記録を海ワシの記録として扱うため、史料中の名称がイヌワシとクマタカを含んでいるのか検討したうえで生息記録を整理する。

1-1. 問題の背景

オジロワシ・オオワシは、越冬のため北海道東部などに多く渡来する。オオワシは知床半島羅臼海岸に集まっていたが、漁獲量の減少とともに分散し、近年は分布域が拡大しており（中川 2009：3）、オジロワシも近年は繁殖分布が拡大している（白木 2017：99）。分布域だけをみれば生息環境は良好に思えるが、多くの海ワシが人間活動に由来する餌資源へ依存していることが課題として挙げられ、将来にわたって安定的に生息できるかどうか懸念されている。その具体的な問題点としては、漁業活動によって投棄される人為的な餌資源への依存が、ワシの行動や集団内の遺伝形質に影響を及ぼす可能性や、産業構造の変化により餌の供給が突然絶たれる可能性が指摘されている（白木 2017：99-101）。また、観光船からのオジロワシ・オオワシへの餌付けによって、餌に集まったワシの空中衝突や落水、岩壁への衝突、餌付け地近くの道路での交通事故が報告されているほか、鳥インフルエンザの感染リスクが危惧されている（齊藤 2018：56-59）。

こうした状況を踏まえ、環境省によるオジロワシ・オオワシ保護増殖事業では、「自然状態で安定的に存続できる状態」をつくることが目標として設定されている（文部科学省ほか 2005a：1、2005b：1）。この目標を達成するためには、個体群の安定的な存続のために必要な生息地のサイズや配置に関する研究を行うことや、保全のあり方について十分な議論がなされることが必要だと指摘されている（白木 2009：7、白木 2017：99-101）。

このような生息地の分散や配置を考えるにあたっては、人間によるさまざまな活動の影響を受けて変化する、生物とその生息環境の短・長期的な推移などの情報を把握することが必要だとされる（前田 1996：80-81）。オジロワシ・オオワシの生息・越冬分布についての調査は 1980 年代から行われ情報が蓄積され続けているが（オジロワシ・オオワシ合同調査グループ事務局 1982 など）、それ以前の分布に関してまとまった記録はない。しかし、今後の北海道における海ワシの保全について考えるうえでは、長期的な分布の変遷や人為的な餌資源に大きく依存する以前の生息状況を把握することが重要であると考えられる。したがって、人為的餌資源へ大きく依存する前の歴史的な分布情報として、「鷲・鷲羽の主要な産地」（菊池 1993：25）とされる江戸時代の北海道における分布を解明することが必要である。

動物の過去の分布や生息状況を把握する方法として、標本資料や歴史資料を活用することが考えられる。オジロワシ・オオワシと同様に北海道に生息する希少な猛禽類であるシマフクロウについては、標本資料を主に利用しつつ、文献資料やアイヌに伝わる伝承を組み合わせ、その分布の長期的な変遷を明らかにした研究がある（早矢仕 1999）。タンチョウに関しても、北海道に生息するタンチョウを含めたツルの生息実態を江戸時代の歴史資料から明らかにした研究がある（久井

2016)。一方でオジロワシ・オオワシなどの北海道の海ワシについては、歴史資料を用いた過去の分布を復元する研究が行われていない¹⁾。オオワシ・オジロワシの保全に対する行政の取り組みは、同じく北海道に生息し環境省によって保護増殖事業が行われている大型鳥類であるシマフクロウやタンチョウに比べて10年ほど遅れをとっていると指摘されるが(白木2009:6)、歴史資料や標本資料から過去の分布を推定・復元する研究も遅れをとっている。その理由の1つとして江戸時代の名称と現在の生物としての名称の対応関係が十分に整理されてこなかったことが考えられる。江戸時代からタンチョウは「たんてう(丹頂)」、シマフクロウは「しまふくろふ」の名で知られていたと言われる(菅原・柿澤1993:220、279)²⁾。一方で、オオワシは「えぞわし」「おほわし」の名が挙げられるが(菅原・柿澤1993:57、83)、「えぞわし」という名称が江戸時代の北海道で用いられた事例は確認できていないうえ、「おほわし」にオジロワシが含まれた可能性も十分に検討されていない。江戸時代においてワシは主に羽の模様や枚数によって区別されており、史料中の名称と現在の名称の対応関係を厳密に把握して分布を復元することが求められる。以上のような背景を踏まえ、今後の海ワシの保全のあり方を議論する前提となる情報を得るためには、歴史資料を用いて史料中の名称と現在の名称の対応関係を十分に整理したうえで、江戸時代の北海道における海ワシの分布を解明する必要がある。

1-2. 先行研究の概要と本稿の問題意識

古くからワシの羽は弓の矢羽として用いられてきた。古代の遺跡からは、ワシ類の可能性が高いタカ科鳥類の骨の一部が出土しており、古代からワシ羽が利用されてきた可能性が指摘されている(山崎2015:73)。また、中世においてワシ羽は重要な交易品であり、北方産のワシ羽が京都に流通していたほか(久水2024:75-82)、12世紀創建の鶴岡八幡宮には、北方に生息するオオワシまたはオジロワシの尾羽と推定される「黒漆矢」の矢羽が収蔵されている(天野・藤井2023:46)。そして、重要な交易品であるワシ羽を求めて北方のオホーツク文化や擦文文化が拡大・移動した可能性が指摘されている(瀬川2007:150-151、澤井2008:239)。

このように古くから北方地域はワシ羽の重要な産地であったが、特に江戸時代の北海道は「鷺・鷺羽の主要な産地としてひろく知れわたっていた」(菊池1993:25)とされ、主に「鷺羽」の交易・利用、「鷺」の狩猟・飼育に着目した研究が行われてきた(菊池1993、高瀬2002、長澤2005、瀬川2007、蓑島2015など)。これらの研究では、「鷺羽」の種類による交易価格の差異に着目するうえでワシの種の違いに言及しているものの、論文中で一貫してワシの種の違いを踏まえて比較・分析するには至っていない。また、史料に記載された「鷺」の同定を行わずに安易にオオワシと直結させて検討している研究がある(瀬川2007:132-156、久水2024:83)。しかし、ワシの分布を明らかにすることを目的とする本稿では、史料に記載された「鷺」がどの種のワシであるのか厳密に同定を行う必要がある。

これらの研究はワシの種ごとに分布や生息状況を明らかにすることを目的とした研究ではないが、海ワシの餌となるサケ科 Salmonidae の魚類(以下はサケと表記)やエゾシカ *Cervus nippon yesoensis* との関連について重要な指摘がされている。菊池(1993:28-29)は、サケの遡上が減りワ

1) 東北地方の海ワシに関しては、野鳥の会支部報・各種調査報告書・個人記録などの過去の文献を調査して得られた1935年から2014年までの出現記録を環境省(2014)が整理している。

2) ただし、江戸時代には現代の和名と一致しない名称も用いられていた。

シを獲ることが難しくなり、釧路場所のアイヌが根室場所請負人による河口での漁業の禁止を訴えた事例を提示し、サケの遡上とワシの捕獲に密接な関係があったことを指摘している。また、箕島(2015: 179-185)はエゾシカ皮が大量に生産された時代には、北海道の内陸部で放置されたエゾシカの屍骸にオジロワシ・オオワシが群がっていた可能性があるかと推測している。このような指摘を踏まえ、本稿では、海ワシの生息状況を明らかにするうえで重要な餌資源であるサケに着目する。

他方で、ワシの種の違いに着目した研究もある。河井(1995)は、標本資料や絵画資料、文献史料、「鷲」に関する伝承等の調査を行い、過去の北海道においてイヌワシが生息していた可能性について考察している。しかし、これはイヌワシの生息について考察した論考であり、海ワシの分布や生息状況に焦点を当てる本稿とは異なる。また、河井(2006)は、ワシの種の違いを念頭に置き、アイヌによるワシの信仰や交易品としてのワシ羽について考察している。しかし、出典とした史料が示されていない点などが課題であり、ワシの種の違いに着目した実証的な研究は進展の余地がある。これはワシに関する史料中の名称とワシの種の対応関係が十分に把握されていないことに起因する。本稿で史料に記載されるワシの名称とワシの種の対応関係を厳密に整理することで、ワシの種の違いに着目して研究を進展させることができる。江戸時代の北海道における分布や生息状況を明らかにする本稿は、今後の海ワシの保全に寄与するだけでなく、重要な北方交易品であったワシの飼育・狩猟・交易の実態を把握するうえでも不可欠である。

1-3. 本稿の目的

本稿の目的は、江戸時代の北海道・千島・樺太における海ワシの分布および生息状況を明らかにすることである。

本稿では、江戸時代の北海道に関する歴史資料に記録されたワシの種の同定を行い、その結果を踏まえて海ワシの分布という観点から記録を整理する。史料中の名称を海ワシの記録として扱うため、同定の際には史料中の名称がイヌワシとクマタカを指す可能性について検討する。海ワシが特に多く生息していた地域については、主にワシの狩猟数の記録を用いて具体的な生息状況を把握する。なお、オジロワシ・オオワシは渡りを行う鳥であるため、北海道の周辺地域の分布も重要である。そのため、千島・樺太におけるワシの記録も整理し、分布・生息状況を明らかにする。

2. 方法

江戸時代の北海道・樺太・千島における海ワシの分布および生息状況を明らかにするため、当時の北海道・樺太・千島に関する地誌や紀行・旅行記、場所請負史料のほか矢羽に関する史料からワシの記録を収集した。地誌には動植物などの地域の産物についての解説があり、地域ごとの分布を探るうえで重要な史料である。場所請負関係史料には場所ごとのワシ羽の交易の様子が詳細に記録されている。紀行文には、動物の狩猟・飼育の様子や目撃記録が残されており、上記の史料を補うことができる。さらに矢羽に関する史料には、ワシ羽の種類ごとの特徴が記されているため、同定の根拠となる貴重な史料である。

まず史料に記載されたワシの同定を行うため、地誌や紀行・旅行記、場所請負関係史料、矢羽に関する史料を用いた。ワシ羽にイヌワシやクマタカの羽が含まれる可能性については従来厳密に検討されてこなかったが、本稿ではこれらの種の可能性も考慮して同定を行った。

次に、海ワシの種ごとの分布を明らかにするため、地誌や場所請負関係史料などを用いた。「場所」ごとのワシの交易の記録の有無を整理するとともに、ワシの狩猟や目撃情報などの記録を補うこと

で分布の概要を明らかにすることを試みた。ただし、歴史資料を用いて動物の分布を復元する場合、ある動物が生息していた地域を示すことはできるが、生息していなかった地域を示すことは難しい点に留意して考察を行った。

次に、ワシが多く生息していた地域における具体的な生息状況を明らかにするために、主に場所請負関係史料に記されたワシ羽の記録を用いた。「軽物」と呼ばれ、松前藩の専売品であったワシ羽は、場所ごとに集荷された数が記録として残っている地域が多い。このような史料には、記録の正確性・統一性に問題がある可能性はあるが、それを踏まえてもこれらの史料は当時のワシの生息状況やその推移をうかがい知ることができる有用な史料である。地誌、紀行・旅行記などを用いて、記録の正確性・統一性に関する問題を補うとともに、ワシの餌資源との関連から考察を行った。

本稿で史料の記述を引用する際には、表1の番号を〔 〕に記して出典を示した。ワシに関する表記以外は常用漢字に改め、適宜句読点を補うとともに、割書は〈 〉で示した。動物としてのワシに言及する場合はカタカナで表記し、史料中の名称として言及する場合には「 」で括った。また、海ワシの保全に寄与することを目的とする本稿では、地名の初出のみ史料中に記載された名称を用い、以後は現在一般的に用いられている名称を用いた。地名の比定には主に、平凡社地方資料

表1 本稿で使用した史料一覧（以下は出典の略称。北大：北海道大学附属図書館北方資料室所蔵、弘前：弘前市立弘前図書館所蔵、国会：国会図書館所蔵、早稲田：早稲田大学所蔵、函館：函館市中央図書館所蔵）

No. 史料名	成立年	内容	著者・編者	出典
1 矢羽	1636	矢羽	不明	弘前：W789-38
2 本朝食鑑	1697	本草・博物	人見必代	国会：特1-2284
3 和漢三才図会	1712	本草・博物	寺島良安	国会：031.2-Te194w-o
4 松前蝦夷記	1717	地誌	不明	松前町史編集室（1974：386, 388）
5 蝦夷商賈聞書	1739頃	地誌	不明	松前町史編集室（1979：12）
6 貞丈雑記	1763-1784著 1846刊	矢羽	伊勢貞丈	早稲田：ワ03 06592
7 矢羽文考	1776	矢羽	伊勢貞丈	松尾（2003：142）
8 松前志	1781	地誌	松前広長	北大：旧記0626
9 蝦夷拾遺	1786	地誌	佐藤立六郎	北大：（1972：277）
10 蝦夷草紙	1790	地誌	最上徳内	大友（1972：377）
11 夷語俗話	1792	地誌	串原正峯	高倉（1969：494-495）
12 蝦夷巡覧筆記	1797	地誌	高橋社四郎ら	北大：旧記1271、旧記1272
13 松前随商録	1801	地誌	高橋重賢	北大：旧記0185
14 山崎半蔵日誌	1803-1808	紀行	山崎半蔵	吉原（2016：21, 41, 53）
15 熱多羅松談	1806	地誌	黄田権邦	北大：旧記0211
16 館野瑞元ソウヤよりの書簡	1807	紀行	館野瑞元	高倉（1982：478-479）
17 蝦夷紀行	1807	紀行	館野瑞元	高倉（1982：488）
18 東蝦夷地各場所様子大略書	1808-1811	地誌	不明	北海道（1969：540-587）
19 東行漫筆	1809	地誌	荒井平兵衛	秋葉（1991：41-234）
20 東蝦夷地紀行	1810	地誌	間宮林蔵	高倉（1969：101）
21 南千島探検始末記	1811	紀行	ゴロウニ	徳力（1994：174-175）
22 蝦夷広覧	1818-1830	地誌	温井享	北大：旧記0067
23 アッケシ御場所御軽物元代附帳	1820	場所	アッケシ会所	東（2021：23-24）
24 文政五午年 御軽物類直段定帳	1822	場所	村山豪	札幌市教育委員会（1987：24-25）
25 御軽物直段附	1824	場所	ヨイチ場所	東（2021：28）の表8
26 子モロ年中行事	1829	場所	工藤小伝治	函館：K2977-5001
27 啓蒙会譜	1830頃	本草・博物	不明	国会：特7-117
28 両羽博物図譜	1842-1893	本草・博物	松森胤保	酒田市立図書館 光丘文庫所蔵
29 御軽物定例直段附	1853	場所	アッケシ会所	庫岸町史編集委員会（2016：83-84）
30 蝦夷物産誌	1854	地誌	矢戸理	北大：旧記0196
31 蝦夷行程記	1856	地誌	阿部徳斎	板坂（2002：490）
32 松和私説	1856	紀行	窪田子蔵	高倉（1969：251）
33 村方よりの軽物納書控	1856	場所	箱館奉行所志矢名御用所	道立文書館 簿書/4（5件目）
34 エトロフ場所軽物鷺尾取獲場所書	1856	場所	箱館奉行所志矢名御用所	道立文書館 簿書/4（21件目）
35 入北記	1857	紀行	玉虫左太夫	稲葉（1992：190, 200, 205, 254, 273）
36 安政四丁巳年 御入用帳	1857	場所	モンヘツ御用所	小川（2006：64）
37 軽物上納代料覚	1858	場所	モンヘツ御用所	小川（2006：66）
38 軽物小皮類代米代銭覚	1858	場所	モンヘツ御用所	小川（2006：44）
39 軽物小皮類皆納目録之覚	1858	場所	モンヘツ御用所	小川（2006：47）
40 戊午東西蝦夷山川取調日誌	1858	紀行	松浦武四郎	秋葉（1985：363-406）
41 午手控	1858	紀行	松浦武四郎	秋葉（2007：26）
42 蝦夷山海名産図会	1859	地誌	松浦武四郎	秋葉（1997：304-314）
43 御軽物買入値取	1859	場所	モンヘツ御用所	小川（2006：70）
44 明治初期アイヌ風俗図巻（仮称）	明治初期	絵巻	西川北洋	函館：ba001163-002-0005

センター（2003）を用いた。なお、本稿で用いる史料のなかには現代では不適切な表現が含まれる場合もあるが、あくまでも歴史資料における用語や表現として原文のまま記載した。

3. 史料に記載されたワシの同定

歴史資料に記載された動物の情報を正しく理解するためには、史料に記載される動物の名称が現代のどの種を指すのか同定する必要があるとされる（久井 2013：10、2014：56）。ワシ羽に関する歴史的な名称については一部検討が行われているが（瀬尾：14-30、鈴木 1996：680-681、松尾 2003：134-139 など）、分布を明らかにすることを目的とする本稿では、イヌワシやクマタカの可能性も含めて改めて同定を行う必要がある。そこで、本章では江戸時代の北海道において用いられたワシの名称が、現在のどのワシを指すのか明らかにすることを目的とする。以下では、本研究の調査で海ワシに関する名称として確認できた9つの名称（「鷺」「鵬」「真羽」「大鳥」「小鳥」「粕尾」「薄氷」「元黒」「白尾」）を対象に同定を行う。

3-1. 「鷺」「真羽」と「鵬」「小鳥」

本節では、「鷺」と「鵬」「真羽」「小鳥」という4つの名称が指すワシの種類について検討する。日本の古典籍に記載された鳥類の名称を現代の生物名に同定した菅原・柿澤（1993：480-483）は平安時代の『倭名類聚鈔』を引用し、「鵬（おほわし）」はオオワシの成鳥、「鷺（こわし）」はオオワシの若鳥、オジロワシ、イヌワシを指していると推測している。しかし、その同定の根拠については示されていない。矢羽や有職故実に関する先行研究では、「真羽」はオオワシの尾羽、「小鳥」はオジロワシの尾羽を指す名称とする見解が定説となっている（瀬尾 1940：14-27、鈴木 1996：680、松尾 2003：137-138）。

江戸時代の本草学や博物学に関する史料の『本朝食鑑』[2]や『和漢三才図会』[3]では、「鵬」の訓読みとして「おおわし」、「鷺」の訓読みとして「こわし」という名称が記されている。これは菅原・柿澤（1993：483）が引用する『和名類聚鈔』と同様の読み仮名であった。しかし、「鵬（おほわし）」はオオワシの成鳥、「鷺（こわし）」はオオワシの若鳥、オジロワシ、イヌワシと同定できる史料は確認できなかった。一方で、江戸時代の北海道の地理や産物について詳細な記述がみられる『松前志』[8]は以下のように、「鷺」を「（大鷺）おおわし」、「鵬」を「こわし」と読み、本草学・博物学に関する史料と反対の訓読みを付していた。

（前略）鷺鵬共ニ今云ワシニシテ、鷺ヲ大鷺トシ鵬ヲコワシトスヘキモノナリ。（中略）大鷺尾十四羽ナルモノ夷地東部モンヘツヨリ出ルヨシ東部シフサク夷人云リ。是国俗ノ所謂真羽ナリ。（中略）宝暦中国俗所謂フチワシナルモノ東部クスリヨリ出タリ。其尾十四羽ニシテ白シ。是又鷺ナリ。疑クハ鷺ノ雄ナランカ。真羽或ハ古ニ真鳥羽ト云フ。十二羽ナルモノヲ小鳥ト云。即チ鵬ノ羽ナリ。又鴈アリ。粕尾アリ。是一、二、三ノ歳ニヨツテ名ク。或亦其尾ノ文ヲ以テ云コトアリ（後略）。

ここで「鷺」「大鷺」「真羽」は14枚の白い尾羽を持つと記されている。タカ目タカ科に属する鳥の尾羽は基本的に12枚であるが、オオワシのみ14枚の尾羽を持つことと（風間・土田 2018：92）、尾羽の色が白という特徴は、オオワシの尾羽の特徴と一致する。したがって『松前志』[8]では、「鷺」と「大鷺」「真羽」はオオワシを指す名称として用いられていると推測できる。

他方で『松前志』[8]で「鵬」は「コワシ」と呼ばれ、その尾羽の枚数は12枚であると記されている。北海道に生息する12枚の尾羽を持つ大型のタカ科鳥類としてはオジロワシ、イヌワシ、クマタカの可能性が考えられる。しかし、2節で後述するようにオジロワシを指すと考えられる「粕尾」や「薄氷（鴈）」などの総称として「小鳥」「鵬（こわし）」が記されていることを考慮すると、「小鳥」と「鵬（こわし）」はオジロワシを指す可能性が高い。『蝦夷拾遺』[9]においても、「糟尾、ウスビヨウ」などと呼ばれる「鵬羽」と、「真羽」の項目を区別しており、「真羽」がオオワシ、「鵬羽」がオジロワシの尾羽を指す名称として用いられていると解釈できる。

次に「小鳥」が同じく12枚の尾羽を持つクマタカを指す可能性について検討する。『松前志』[8]においては「ワシ並クマタカ」と区別され、『松前蝦夷紀』[4]においても「鷲尾」と「角鷹」は明確に区別されていることが確認できる。尾羽の模様もクマタカは横斑があるため（森岡：512-515）、オジロワシとは大きく異なる。したがって、クマタカは「鷲羽」である「小鳥」「鵬（コワシ）」には含まれなかったと解釈できる。

「鵬（コワシ）」や「小鳥」がイヌワシを指す可能性について検討する。本州で描かれた『両羽博物図譜』[28]では「小鳥」としてオジロワシが描かれている一方で（図1）、『啓蒙禽譜』[27]にはイヌワシと同定できる絵に「小鳥」の名が付けられている（図2）。したがって、本州では「小鳥」がオジロワシとイヌワシ両種を指す名称として用いられていたと推測できる。しかし、『松前志』[8]の「小鳥」が指すワシにイヌワシが含まれたのかどうかという点は、当時の北海道にイヌワシが生息していたのかという問題に大きく関わる。

江戸時代の北海道にイヌワシが生息していた可能性を探る端緒として西川北洋が明治時代の初めに描いたとされる「明治初期アイヌ風俗図巻（仮称）」[44]のワシ鴞の絵が紹介されている（河井1995：67-68）（図3）。確かに尾羽の根元が白く、先端が黒く描かれている点はイヌワシのように見える。しかし、イヌワシ幼鳥の特徴である風切羽の白斑が見られない点や、嘴が黄色くやや太い点、尾羽の白帯がイヌワシ幼鳥の濁った白帯よりも白みが強い点などを総合するとオジロワシ幼鳥もしくは若い個体の特徴に近いと考えられる（日本イヌワシ研究会副会長・高橋誠氏より私信）。

この絵巻はワシ鴞の様子を写実的に描いたのか、聞き取った話から想像で描いたのか、あるいはワシの絵や剥製などを参考にして描いたのか明らかではない。同絵巻に描かれたシマフクロウについては、「全くシマフクロウらしくないため、西川北洋が本当にフクロウ送りを見て描いたものか、極めて疑わしい」と評価されている（長谷川2006：78）。作者の西川北洋については、後に旭川出版社から発行された際の編者による序文に情報があるのみであり（西川1941）、タイトルに「仮称」と付けられていることからわかるように、来歴について不明な点も多い。そのため、来歴と写実性に疑問の残るこの絵巻だけからイヌワシが生息していたと断定することはできない。この絵巻以外の史料からもイヌワシと断定できる記録は現時点では確認できていない。したがって、江戸時代の北海道では「小鳥」は主にオジロワシを指す名称として用いられており、イヌワシを指す可能性は低いと結論付ける³⁾。

一方で、「鵬」が明らかにクマタカを指す事例が確認できた。本草書の『本朝食鑑』[2]では「鵬」

3) 当時イヌワシが生息していた可能性は否定できないが、主に山地に生息するイヌワシは記録として残りにくいため、文献史料のみから生息実態を明らかにすることは困難である。しかし、当時の北海道にイヌワシが生息していたかどうかは重要な問題であり、その生息の可能性については今後も史料調査を進めて検討すべき課題である。



図1 『両羽博物図譜』の「小鳥」
(光丘文庫所蔵)



図2 『啓蒙禽譜』の「ワシ（小鳥）」
(国立国会図書館所蔵：特 7-117)



図3 『明治初期アイヌ風俗図巻』のワシ獺の図
(函館市立中央図書館所蔵：be001163-002-0005)

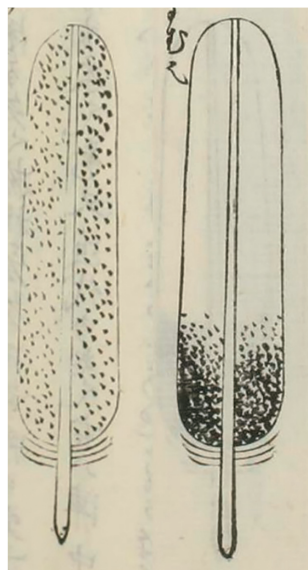


図4 『貞丈雑記』の「かすば」と「うすべう」
(早稲田大学所蔵：ワ 03 06592)

が「くまたか」とも読まれたが、同様に松浦武四郎もクマタカを指す名称として「鵬」を用いていることが確認できる。武四郎は、『戊午東西蝦夷山川取調日誌』[40]（以下『戊午日誌』）において、北海道東部でヤマセミ *Megaceryle lugubris* を捕まえた際の様子について「是を見るに、其羽小さきも大なるも鵬の羽の如く斑有り」と記し、ヤマセミの羽の横斑の模様を表現している。オジロワシやオオワシにはこのような横斑はなく、ここで用いられた「鵬」は横斑が特徴であるクマタカを指していると考えられる。一方で、武四郎は、『蝦夷山海名産図会』[42]で「角鷹」を「クマタカ」、

「鷺」を「ヲ、ワシ」、「鵬」を「コワシ」として用いているなど名称の不統一が確認できることから、史料によって指し示すワシの種類が異なると考えられる。

以上を整理すると、『松前志』に記された「鷺（おおわし）」「真羽」はオオワシ、「鵬（コワシ）」「小鳥」はオジロワシを示す名称として解釈できる。「真羽」をオオワシ「小鳥」をオジロワシとする点では、瀬尾（1940：14-27）、鈴木（1996：680）、松尾（2003：137-138）の見解と一致した。一方で、「鵬（おほわし）」はオオワシの成鳥、「鷺（こわし）」はオオワシの若鳥、オジロワシ、イヌワシを指していると推測する菅原・柿澤（1993：480-483）とは異なる結果となった。また、「鷺」と「鵬」が指すワシの種類は多様であり、北海道に関する史料を記した人々が「鷺」と「鵬」を本草学や博物学の基準に基づき区別したのか、『松前志』[8]のように区別したのか、あるいは全く区別していなかったのか判断するのは困難な事例がある。したがって、第4章以降では、「鵬」と「鷺」が指すワシの種類が判別できない場合は、単にワシの記録として扱う。

3-2. 「粕尾」と「薄氷」

本節では「粕尾」と「薄氷」という2つの名称が指すワシの種類について検討する。矢羽や有職故実に関する先行研究では、「粕尾」はオジロワシ幼鳥の尾羽、「薄氷」はオジロワシ成鳥の尾羽であるとする見解が定説である（瀬尾 1940：27-28、鈴木 1996：681、松尾 2003：137-138）。そのため先行研究もこの定説に従っている（菊池 1993：25、糞島 2015：176-177）。

「粕尾」や「薄氷」は『松前志』[8]などの地誌のほか、交易に関する史料でも広く確認できた。『松前志』[8]によると、尾羽の枚数が12枚であると「鵬（コワシ）」は、年齢や尾羽の模様によって「粕尾（かすお）」や「臘（うすびょう）」などと呼ば分けられ、「臘」は「薄氷」とも呼ばれた。

「粕尾」や「臘（薄氷）」と呼ばれた矢羽を同定する根拠となる史料として、有職故実に精通する伊勢貞丈が著した『貞丈雑記』[6]がある。『貞丈雑記』[6]には、「かすぽ」と「うすべう」と呼ばれた羽が描かれている（図4）。「かすぽ」は白地に小さく黒い斑点が全体に見られ、「うすべう」は白地で羽の基部には黒い斑点が多く見られる。オジロワシの尾羽の枚数は12枚であり、幼鳥の場合には、「汚白色の地に黒褐色のごま斑と、黒褐色の縁取りがあるか、黒褐色地に白っぽい虫食い斑や、霧吹き状斑がある」とされる（森岡ほか 1995：461）。したがって、「粕尾」「かすぽ」はオジロワシの幼鳥から幼鳥に近い若鳥の尾羽と考えられる。また、オジロワシの尾羽の模様は個体差が大きいものの、成長するにつれて尾羽の白い部分が増え、成鳥の尾羽は全体が白く基部のみに暗褐色斑が残る（知床町立知床博物館 1990：16、森岡ほか 1995：460-463）。このことから、「臘・薄氷（うすびょう）」はオジロワシの成鳥に近い若鳥および成鳥を指すと推測できる。

オジロワシ以外のワシの羽の可能性を検討すると、イヌワシの幼鳥の尾羽は先端が黒色で根元が白く、成鳥の尾羽には暗褐色の横斑があるため（森岡ほか 1995：530-533）、「粕尾」や「薄氷」の特徴とは異なる。また、クマタカの尾羽にも横斑があるため（森岡ほか 1995：512-515）、この絵の特徴には当てはまらない。したがって、従来の定説通り、江戸時代においてもオジロワシ幼鳥を指す名称として「粕尾」、オジロワシ成鳥を指す名称として「臘・薄氷（うすびょう）」が用いられていたと結論付けられる。

3-3. 「大鳥」「白尾」と「元黒」

本節では、「大鳥」「白尾」「元黒」が指すワシの種類について検討する。「大鳥」と「白尾」はオオワシの尾羽であると解釈されることが一般的である（瀬尾 1940：14-23、鈴木 1996：680-681、松

尾 2003 : 137)。「元黒(本黒とも)」は同じく羽の根元が黒いオジロワシ成鳥の「薄氷」と似ているが色合いが微妙に異なり、オオワシの尾羽を指す独自の名称として使い分けられていたと指摘されている(瀬尾 1940 : 20-29、鈴木 1996 : 681、松尾 2003 : 137-138)。

「大鳥」「白尾」「元黒」はワシ羽の取引に関する記録において確認できた。例えば、蝦夷地再直轄の際に定められた、アイヌから買い上げる軽物類の公定価格についての覚書きである「御軽物定例値段附」[29]では、「大鳥尾」「真羽尾」「元黒尾」「粕尾」などの価格を記した後に、以下のように付け足している。

但〈大鳥尾、真羽尾、元黒尾〉数拾四本ツ、外十式本ツ、
右者御上納之節能々尾数相改、痛等上中下夫々直段高下相調可申候。

ここで「大鳥」と「真羽」は14本とされていることから、オオワシを指すと推測できる。一方で、「元黒」が指すワシの種類については疑問が残る。『入北記』[35]によると根室場所ではワシ羽として「薄氷」が記録されるが、厚岸や釧路場所では、「薄氷」は記録されず、その代わりに「元黒」の名称が確認できる。どちらも根元が黒い羽なのでよく似ているため、「元黒」と「薄氷」がどちらも同じオジロワシの尾羽を指す名称として用いられた可能性が指摘できる。

「元黒」がオジロワシの尾羽を指していると解釈できる史料として、弘前市立弘前図書館所蔵の矢羽の絵図がある[1]。この絵図では、ワシの「小鳥羽」を「もと黒」とも呼ぶと記され、羽の根元が薄黒く、先端4分の3ほどが白い矢羽が描かれている。「小鳥」は、12枚の尾羽を持つワシのことであり、ここでは、オジロワシ若鳥から成鳥の尾羽を「もと黒」と呼んでいると解釈できる。また、『入北記』[35]では、釧路場所の産物である「真羽ホロ三拾二本」と「粕尾元黒同三拾本」の価格が区別される。鈴木(1996:681)によると、「ホロ(保呂、母衣)」とは風切羽を指す名称であるが⁴⁾、ここで「真羽」と「粕尾・元黒」を区別しているのは、オオワシとオジロワシの風切羽を区別していたからだと推測できる。したがって、以上の記録から「元黒」はオオワシの尾羽を指す場合とオジロワシの尾羽を指す場合があったと考えられる。

さらに、取引の記録には「白尾」という品目が挙げられる[26][34]。伊勢貞丈は『矢羽文考』[7]で、「雪白」の別名として「白尾」「雪尾」を挙げ、少しも黒点がない白い矢羽であると述べている。これは尾羽基部に褐色斑が残るオジロワシではなく、純白の尾羽をもつオオワシを指すと考えられる。「白尾」には「十四枚の尾に全く符が無いものと極く少しあるものとが有る」と述べる瀬尾(1940:22-23)の見解と一致している。このように基本的に「白尾」はオオワシの尾羽と考えられる一方で、オジロワシの成鳥はその名の通り尾羽が白く、飛翔時や木に停まっているときには尾羽基部の小さな褐色斑は見えにくいため、オジロワシ成鳥のことを白尾と呼んだ可能性も否定できない。したがって、矢羽に用いられた「白尾」についてはオオワシの尾羽と解釈し、矢羽の状態でない生きたワシを指す「白尾」についてはオジロワシとオオワシどちらを指すのか史料ごとに検討する必要がある。

4)「保呂羽」は、広義には翼の下端に連なる羽の総称である一方で、狭義には、先端にある十枚の「風切」と、さらに内側にある三枚の「鉈」を除いた羽と言われる(鈴木 1996 : 681)。これを鳥類学で一般に用いられる用語で表すと、広義の「保呂羽」は初列・次列・三列風切の総称、狭義には次列風切の一部と三列風切である。

以上を整理すると、「大鳥」についてはオオワシの尾羽であるとする定説と一致する結論となった。他方で、「元黒」はオオワシを指す場合と、似た模様であるオジロワシの「薄氷」を指す場合があると推測できた。つまり、「薄氷」と「元黒」を区別していたと考える瀬尾(1940:20-29)や松尾(2003:137-138)と異なる見解となった。「白尾」は基本的にオオワシの尾羽を指すと推測できる点で先行研究の見解と一致したが、矢羽の状態でない生きたワシを指す「白尾」についてはオジロワシとオオワシどちらを指すのか史料ごとに検討する必要性を指摘した。以上の同定結果に基づき、次章以降で海ワシの生息記録を整理する。

4. 北海道・樺太・千島におけるワシの記録の分布

本章では、地誌や紀行文、場所請負関係史料などを用い、海ワシの種ごとの分布傾向を明らかにすることを目的とする。

図5は、分布の傾向を把握するために、主に地誌や場所請負関係資料等に記載された種が不明の「鷲」・オジロワシ・オオワシの記録を整理した地図である。ただし、「鷲羽」の交易が確認できない地域にもワシが生息していた可能性を考慮し、適宜その他の史料から記録を補った。図に記載された地名に対応するアルファベットは、初出の場合のみ本文中に(図5-A)のように表記した。なお、いくつかの記録を集約して地域ごとに1つの点で示したため、点の数は記録の数とは一致しないことと、点のある場所は必ずしも正確な生息地点を示すものではないことには留意して考察を行った。

アイヌによるワシの狩猟は、遡上するサケを狙ってワシが渡来する冬期に河川で行われただけでなく、ワシ羽の交易のためにアイヌによってワシが飼育されていたことが知られている(菊池1993:30-32)。しかし、『入北記』[35]や『御軽物定例値段附』[29]では「飼鷲尾」とその他のワシ羽が区別されており、「飼鷲」以外のワシ羽の交易の記録を主に用いることで主に越冬期の海ワシの生息状況を復元できると考えられる。一方で、鉄砲を用いた和人による狩猟は夏期にも行われたため、

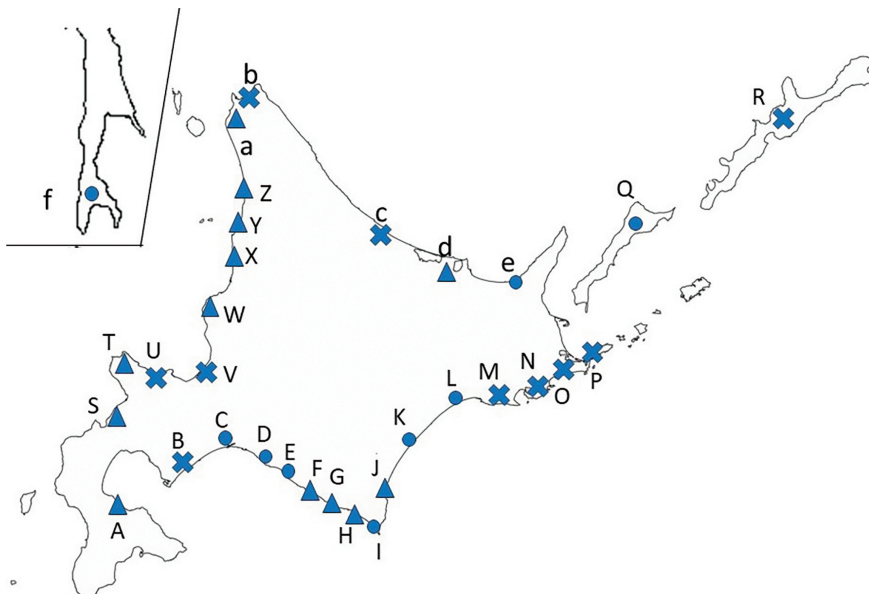


図5 ワシの記録の分布 (●は種不明の「鷲」の交易記録、✕はオオワシとオジロワシの交易記録、▲は狩猟や目撃記録)

目撃・生息記録については季節が不明な場合がある。

4-1. 太平洋側におけるワシの記録

まず、東蝦夷地と呼ばれた太平洋側の地域から確認する。『松前随商録』[13]と『東蝦夷地各場所様子大概書』[18]には、サル(沙流)、ニイカツ(新冠)、ホロイツミ(幌泉)、クスリ(釧路)、アッケシ(厚岸)、キイタフ(霧多布)、子モロ(根室)、クナシリ(国後)、エトロフ(択捉)場所で「鷺羽」が産出されることが記されている(図5-D、E、I、M~R)。同じく『東蝦夷地各場所様子大概書』[18]には、ニイカツ(新冠)、シヅナイ(静内)、ミツイシ(三石)、サマニ(様似)には「鷺」が生息していることが記されている(図5-E~H)。『入北記』[35]では、この他にユウフツ(勇払)でも「鷺羽」が記録され(図5-C)、『蝦夷行程記』[31]では美郎(広尾)にも「鷺」が生息することが記されている(図5-J)。また、古い記録ではトカチ(十勝)やシラスカ(白糠)でもワシ羽が産出することが記されており(図5-K、L)[5]、太平洋側の広い地域に海ワシが生息していたと考えられる。

ワシの種が同定できる記録に着目すると、『東行漫筆』[19]および『入北記』[35]には、釧路、厚岸、根室場所の産物として、「真羽」や「粕尾」「薄氷」などが記されるため、オジロワシ・オオワシが生息していたと考えられる。また、択捉島のシヤナアについて『蝦夷草紙』[10]では、「此処鷺の羽の出る所にして、蝦夷地鷺の羽出産第一の場なり。真羽、薄氷、糟尾の三品ともに比類なき上品のもの多し」と記されている。「真羽」「薄氷」「糟尾」とあることから、択捉島でも、オジロワシ・オオワシが狩猟されていたことが読み取れる。このように釧路、厚岸、根室、択捉場所では「真羽」が産出される一方で、釧路以西の太平洋側の地域で「真羽」などオオワシを指す名称が確認できる地域は白老場所のみに限られている。したがって、釧路以東の地域がオオワシの主な越冬地であったと考えられる⁵⁾。

釧路以西の太平洋側の地域でオオワシに関する交易の記録が唯一確認できたのがシラライ(白老)場所である(図5-B)。文化六(1809)年の『東行漫筆』[19]には白老場所のワシ羽としてオオワシを示す「大鳥」とその「並」の買入れの値段が記されている。「大鳥」とその「並」で値段を書き分けていることから、白老周辺の地域に一定数のオオワシが越冬していた可能性が高い。松浦武四郎は、安政五(1858)年の蝦夷地調査の際のフィールドノートである『午手控』[41]において、白老では「大きな鷺の羽根の取れしと云事。シイラプは大鷺の羽の事也」と記している。ただし「取る」ではなく「取れし」と記していることから、武四郎が調査を行った時点でオオワシが越冬していたかどうかは疑問が残るが、少なくともそれ以前にはオオワシが越冬していたと推測できる。

一方で、太平洋側でオジロワシのみを交易している場所は現時点では確認できていない。しかし、オジロワシのみが産出される場合、オオワシと区別する必要がなく、単に「鷺」と表記していた可能性が考えられる。史料中で「鷺」と記されている記録には、オジロワシを指すものも多く含んでいると考えられることから実際の生息地はこれよりも広がった可能性がある。

和人地と呼ばれた道南地域の太平洋側では「鷺羽」の交易の記録は1件も確認できなかったが、和人による狩猟の記録が確認できた。例えば、北海道を警備した津軽藩士が残した『山崎半蔵日誌』[14]には現在の茅部郡の森町周辺(図5-A)で「鷺」を狩猟したことが記されており、ワシが全く

5) なお、国後場所に関する記録では単に「鷺」と表記され、オオワシと同定できる記録は確認できなかった。

生息していなかったわけではない。

釧路以東が主要なワシの産地であったとする菊池（1993：26-27）の通り、釧路以東の記録が多く確認でき、海ワシの主要な越冬地であったと考えられる。ただし、白老でのオオワシの記録や道南でのワシの狩猟の記録もあり、太平洋側の広い範囲に生息していたと考えられる。

4-2. 日本海・オホーツク海側の記録

次に、西蝦夷地と呼ばれた日本海側やオホーツク海側の地域や北蝦夷地と呼ばれた樺太におけるワシの記録を確認する。『松前蝦夷記』[4]『蝦夷巡覧筆記』[12]『松前随商録』[13]には、イシカリ（石狩）やソウヤ（宗谷）、シャリ（斜里）、からと島（樺太）における「鷺羽」の交易が記録されている（図5-V、b、e、f）。

オホーツク海側のモンベツ（紋別）場所では、安政五年にソウヤ場所に「鷺羽」11 尻⁶⁾を上納している[39]。このうち、1 尻はショコツ（紋別市渚滑）、3 尻はモンベツ（紋別）、6 尻はトコロ（北見市常呂）、1 尻はトウフツ（濤沸湖周辺）（図5-c、d）のアイヌから買い上げたものである[37] [38] [39]。紋別場所の「御軽物買入値段」[43]には「飼鷺羽」の値段が記されていることから、上記のワシ羽の一部には飼育個体のものが含まれている可能性がある。しかし、紋別で獲られた「粕尾」2 尻は損傷が激しかったことが記されている[36]。飼育下のワシであれば損傷のない状態で尾羽を抜くことができると考えられ、痛みの激しい尾羽はその年の冬に獲られた可能性が高いと推測できる。このようにオホーツク海側でも冬期にワシ猟が行われることがあり、海ワシが越冬していたことがうかがえる。

日本海側では、『蝦夷行程記』[31]にイワナイ（岩内）やマシケ（増毛）、フウレベツ（初山別）などにも「鷺」が生息していたと記録されている（図5-S、W、Y）。これらの地誌に記録されない地域でも、夏期に積丹で和人が「白尾」の鷺を鉄砲で狩猟している[16] [17]。さらに、『戊午日誌』[40]では、ハンケセトシナイ（苫前付近）、チカフカルシ（遠別付近）、シュルクセトシナイ（稚内付近）に「鷺取小屋」があることが記録されていることから、冬期に海ワシが生息していたことは間違いない（図5-X、Y、Z）。いずれの場所でも「鷺取小屋」があるのは小川であり、餌となる魚を求めて海ワシが小川に来ていたと思われる。西蝦夷地側では「鷺羽」が文献に出てくる頻度が少なく、産出数が少なかったと推測されているが（菊池 1993：27）、日本海やオホーツク側でも河川周辺を中心に広範な地域に生息していたと考えられる。

ワシの種がわかる記録に着目すると、石狩と余市では、「真羽」と「粕尾」が産出されている。石狩でもワシ猟が行われたことが『蝦夷山海名産図会』[42]に記されていることから冬期にオジロワシとオオワシが生息していたと考えられる[24] [25]。また、『夷諺俗話』[11]で宗谷場所における「鷺羽」の値段としてオジロワシ・オオワシ両種に関する名称が挙げられているため、宗谷にもオオワシが生息していた可能性が高い。また、紋別や紋別市渚滑では「粕尾」が産出されたことが記録されているほか[36]、『松前志』[8]にも紋別で「大鳥」が獲れたことが記録されている。

以上の記録をまとめると、オオワシは樺太・千島のほか北海道東部や北部に記録が残っている。道央にも記録は残っているが、記録された数は少ない。オオワシの生息については『松前志』で次のように述べられている。

6) オオワシの場合は尾羽 14 本を 1 尻、オジロワシの場合は 12 本を 1 尻と数えた。

大鷲尾十四羽なるもの夷地東部モンベツより出るよし。東部シフサク夷人云へり。是国俗所謂真羽なり。又東部ラッコ島を初ホロムシよりも真羽出ると云ふ。又北部はカラフト島よりも出ると云へり。然とも一説は大鷲は松前地方の産にあらず。遠嶋より出るとも云ふ。其真偽未詳也。[8]

真偽は未詳とされているものの、この記述から、オオワシは主に千島や樺太に多く生息し、北海道の東部や北部にも生息していたと推測される。また、『蝦夷拾遺』[9]では、オオワシについて「真羽は異国の産にて、小舟の方よりカラフト島の夷人買出し、亦カムサツケの方より渡ると云へども、稀には蝦夷地にも有を見る」と記されている。この記述からも江戸時代において、オオワシは千島などに多い北方のワシと認識されていたことがうかがえる。現在でも、特にオオワシは道東中心に越冬していることが明らかにされており（中川 2013：283）、概ね同様の分布傾向を示している。

ここまで、海ワシの記録の分布から海ワシの分布の傾向を確認してきた。しかし、これらの記録には年代の異なるものが多く含まれている。次章では、海ワシが多く生息していた北海道東部と、千島における生息状況について、主に江戸時代後期（特に1800年以降）の記録から明らかにする。

5. 狩猟の記録からみる海ワシの生息状況

前章では、北海道・樺太・千島における海ワシの分布の傾向を明らかにした。先行研究では地域ごとの詳細な生息状況については明らかにされていない。本章では海ワシが特に多く生息していたと考えられる北海道東部と択捉島の生息状況について、主に江戸時代後期（1800年以降）の狩猟の記録を用いて明らかにすることを目的とする。

5-1. 北海道東部における海ワシの生息状況

まず、ワシ羽の主産地であり海ワシが多く生息していたと推測される北海道東部における生息状況について述べる。既に述べた通り、道東の根室場所や釧路場所などではオジロワシとオオワシの羽が多く産出されていたため、狩猟が行われる越冬期にこれらの海ワシが多数生息していたことは間違いない。具体的な狩猟場所としては、文化七（1810）年頃の『東蝦夷地各場所様子大概書』[18]と『東行漫筆』[19]ではクスリ（釧路）川上、ニシヘツ（標茶）、ホンケネ（中標津）、シヘチャ（標茶）など内陸部の河川が挙げられている。また、幕末の記録では、『蝦夷山海名産図会』[42]に道内でニシベツ川（西別川）がワシの第一の産地であると記されているほか、同じく松浦武四郎の『戊午日誌』[40]にコトンナイ（標茶付近）やシュンベツ（別海付近）など多くの場所にワシ猟に用いる小屋があったことが記録されている。したがって、江戸時代後期を通じて道東の内陸部の河川に多くのワシが越冬していたと推測できる⁷⁾。

このように海ワシの生息を可能にした大きな要因の1つとして、餌となるサケの生息が挙げられる。冬期や秋期の海ワシの分布にはサケの死体の分布が強く影響していることが知られているが（植田・小坂・福井 1999：26-27、中川 2009：2-3、外山・松本 2019：69-77 など）、江戸時代においても、根室に「ペトカと云河あり。冬十一、二月の頃鷲河中の魚を取らんと多く来り集る」ことが『協和私役』[32]で述べられ、ワシの餌となるサケとの密接な関係が語られている。また、ワシの

7) 『蝦夷広覧』[22]には、「冬月鷲の多き地にてハ、大樹におひたしくとまり居る」と記され、海ワシが木に集まって休息している様子がうかがえる。

主産地とされたニシベツ川にもサケが多いことが『蝦夷山海名産図会』[42]に記されている。したがって、サケが多く遡上するこれらの河川は海ワシにとって絶好の餌場であったと考えられる。

その一方で、海岸における生息状況を見ると『蝦夷物産誌』[30]では、「本蝦夷東北海岸ニも多くすめり」と記されており、内陸部の河川だけでなく北海道東部の海岸にも多く生息していたと考えられる。ただし、海岸におけるワシの生息を確認できた記録の数は多くない。しかし、これはワシ猟が基本的に海岸では行われず、河川で行われたことに起因するものであると考えられ、この記録の数の差は必ずしも生息数の差を示すものではない。

5-2. 北海道東部における海ワシの越冬個体数の推定

次に北海道東部における海ワシの越冬個体数を推測するために、釧路・厚岸・根室場所におけるワシの狩猟数に着目する。『東行漫筆』[19]には、釧路場所の産物について「大鳥二把」、「母衣四五千把」と記録されている。1把とは10尻（1尻はワシ1羽分の尾羽）のことを指すため「大鳥二把」はオオワシ20尻である。後述するように風切羽を指す「母衣」は、根室場所の場合ワシ1尻あたり約32本の「母衣」が産出されている⁸⁾。風切羽である「母衣」4,000～5,000羽を32で割ると、およそワシ125尻から155尻分に相当すると推測できる。オオワシ20尻の「母衣」の本数がこのなかに含まれていると仮定すると、文化六（1809）年頃の釧路場所ではオオワシ20尻前後、オジロワシが約105～135尻産出されていたと推定することができる。

文政三（1820）年には厚岸場所のワシ羽の産出数について「真羽」2尻、「粕尾」15尻と記されている[23]。これはオオワシ2尻、オジロワシ15尻と解釈できる。さらに、『子モロ年中行事』[26]によると、文政九（1826）から文政十一（1828）年の根室場所においては、「大鳥尾」13～38尻、「白尾」3～4尻、「薄氷」9～11尻、「粕尾」約80尻が産出されている。つまり、オオワシが約10～40尻、オジロワシが約90尻である。

文政九（1826）から文政十一（1828）年の根室場所、文政三（1809）年の厚岸場所、文化六（1809）年頃の釧路場所と年代はやや異なるものの、3つの場所のワシ羽産出数を合計すると、1年間でオオワシ約30～60尻、オジロワシ約210～240尻が狩猟されていたことになる。近年の北海道および本州北部へのオジロワシの越冬個体数は、700～1000羽ほどと推定されている（環境省2021）。江戸時代には道東の内陸部の河川のみで毎年200羽以上のオジロワシが狩猟されていたとすると、現在の個体数では生息を維持することは困難であると考えられる。したがって、江戸時代後期には現在よりも多くのオジロワシが北海道東部で越冬していたと推測できる。

一方、オオワシの狩猟数はいずれの地域においてもオジロワシよりも少なかった。オオワシは1990年代の半ばまでは海岸や湖沼、河川の河口部に生息し、内陸部にはほとんど入らなかったと言われている（中川2013：286）。そのため、江戸時代においても、ワシ猟が行われていた内陸部の河川上流に入るオオワシは少なく海岸や湖沼に生息することが多かった可能性が考えられるが、海岸や湖沼の生息状況は不明であるため断定はできない。

次に、内陸部への海ワシの越冬状況の変遷の一端を明らかにするために根室場所におけるワシの狩猟数の変化に着目する。表2は長澤（2005：26）が作成した表から根室場所のワシ羽納入数を抜

8) 17年間で産出されたホロ54,066本を産出されたワシ1750尻で割った値（表2参照）。『子モロ年中行事』[26]には、「鷺老羽に付ホロ三拾貳本位、大鳥四十本位抜候定之事」とあるので、ワシ1尻あたりホロ約32本という数値には妥当性がある。

表2 根室場所でのワシ羽の産出量（嘉永元年は史料の落丁、万延元年会津藩領分のみ、慶応二年は仙台藩領分のみ参考値であるため（ ）で記した。産出の記録がない場合は「－」で示した。文政十年の粕尾は長澤（2005：26）の表では8尻となっているが、『子モロ年中行事』[26]を確認したところ8把つまり80尻であったため修正した。なお、文政九（1826）年から文政十一（1828）年は『子モロ年中行事』、それ以外の年は、子モロ場所の「御用留類」による値。詳細は長澤（2005：26）を参照）

年代	大鳥尾 (尻)	元黒尾 (尻)	白尾 (尻)	薄氷尾 (尻)	粕尾 (尻)	ホロ (本)	オオワシ 小計 (尻)	オジロワ シ小計 (尻)	ワシ合計 (尻)
文政九（1826）年	13			9	79	3836	13	88	101
文政十（1827）年	13		3	11	80	3760	16	91	107
文政十一（1828）年	38		4	9	73	3930	42	82	124
天保三（1832）年	22	0	3	3	72	3110	25	75	100
天保六（1835）年	27	10	7	0	100	4800	34	110	144
天保七（1836）年	36	10	8	0	93	4950	44	103	147
弘化元（1844）年	32	11	12	0	71	3800	44	82	126
弘化三（1846）年	22	10	8	0	92	3810	30	102	132
弘化四（1847）年	42	5	16	0	71	3870	58	76	134
嘉永元（1848）年	(2)	(0)	0	0	(3)	(150)	(2)	(3)	(5)
嘉永五（1852）年	14	11	9	0	114	3390	23	125	148
安政元（1854）年	31	7	10	0	83	3930	41	90	131
安政二（1855）年	39	2	3	0	78	3650	42	80	122
安政三（1856）年	30	0	2	3	65	3330	32	68	100
安政五（1858）年	35	0	8	9	42	2700	43	51	94
万延元（1860）年	(11)	(0)	(0)	(0)	(21)	(960)	(11)	(21)	(32)
慶應二（1866）年	(0)	(1)	(1)	(0)	(1)	(90)	(1)	(2)	(3)
合計	407	67	94	44	1138	54066	501	1249	1750

き出し加筆・修正したものである。ここでは、「大鳥」「白尾」をオオワシ、「薄氷」「粕尾」をオジロワシとして種ごとの狩猟数を集計した。また、「元黒尾」の納入数が記されている年には、「薄氷尾」が記されていないことから、第3章で指摘したように「元黒尾」は「薄氷尾」と同じくオジロワシを指すものと考えられる。よって、「元黒尾」もオジロワシとして集計した。

表1をみると、年によって変動はあるもののオオワシは約10～60羽、オジロワシは約50～120羽で合計約100～150羽前後が狩猟されていたことが読み取れる。文政九（1826）年から慶應二（1866）年までの40年間のうち記録が残る17年間だけでもオオワシ509羽、オジロワシ1249羽で合計1750羽狩猟されている。記録が残っていない年の狩猟数にも大きな変動がなかったと仮定すると、40年間であればその倍は狩猟されていたと推測できる。

オオワシについては文政九（1826）年と文政十（1827）年の13羽、16羽を除くと概ね40羽前後で推移している。時代によって狩猟に従事した人数やその仕事量に増減がある可能性は考慮しなければならないが、文政11（1828）年から慶應二（1866）年を通じて根室場所の川沿いに越冬してくるオオワシの個体数の著しい減少はなかった可能性が高い。

一方、オジロワシは嘉永元（1848）年の125羽をピークに減少し続け、安政五（1858）年には記録が残っているうちで最も少ない51羽になっていることから、オジロワシの越冬個体数が減少した可能性が指摘できる。その要因の1つとしては、川に遡上するサケの数の減少が考えられる。

北海道の漁獲量の変遷をみると、文化から慶應年間（1804～1867年）には漁具が改良され、漁労範囲も拡大したにもかかわらず、乱獲により北海道全体で漁獲量が減少した傾向がみられる（北海道水産部漁業調整課1957：141-146）。根室場所では、天保五（1834）年頃には「秋味鮭」の漁獲高は4000～5000石位であったが、安政元（1854）年頃には不漁のため3000石ほどであったとされる（長澤2005：46）。これは、オジロワシが減少した時期とおおよそ重なる。乱獲によってサケの遡上数が減少したことによって、サケを主要な餌とする海ワシの越冬数も減少した可能性が考えられる。

釧路や厚岸場所など一部の地域ではサケの漁獲量の増加傾向がみられるが（北海道水産部漁業調整課 1957: 147）、サケの遡上数については、道東の広い範囲で減少していたと推測される。例えば、松浦武四郎は、安政四（1857）年に漁業の影響でニシベツ川に魚が上らず「熊並に狐・鶯・鷹までも僅」えたことを『戊午日誌』[40] に記録している。実際、安政三年にはニシベツ川河口で張切網を使ってサケを徹底的に捕獲したため上流へのサケの遡上が少なくなり、根室と釧路のアイヌの間で争論が起こった（南 1976: 364）。これらの記録から、道東の広い範囲でサケの遡上数が減少し、それによって海ワシの生息数が減少した可能性が高いと考えられる。しかし、狩猟数が減少しているのはオジロワシのみであり、表 2 からはオオワシの狩猟数の減少は確認できない。オジロワシのみ減少しオオワシが減少していない理由は、サケなどの餌資源の減少のみからは説明できず、これ以外の要因も複雑に関わっていたことが推測される。

5-3. 択捉島における海ワシの生息状況

次に千島のワシの概要について述べたうえで、択捉島におけるワシの生息状況について明らかにする。

千島のワシ羽について、間宮林蔵は、ラソハ（羅処和島）のアイヌが択捉島へ鷺羽を持ってきて交易をし、その羽は特に上品であったことを『東韃地方紀行』[20] に記している。この記述からは、北千島もワシ羽の重要な産地だったことがわかる。また、蝦夷地警護のため択捉島に派遣された津軽藩士の山崎半蔵が残した『山崎半蔵日誌』[14] には、択捉島のシベトロに着いた異国船の乗組員が、アイヌに「大鷺の十四枚尾百羽」を密かに渡して島から逃げようとしたことが記されている。道東の根室場所で 1 年間に獲れるオオワシの尾羽は、40 尻前後で最多でも 58 尻分であったことと比べると、択捉島以北の千島には北海道よりも多くのオオワシが生息していたと推測できる。また、千島を探検したゴロウニンは、『南千島探検始末記』[21] で千島とカムチャツカのワシについての聞き書きを以下のように記している。

鷺が飛来するのは冬だけで、夏はこの猛禽はカムチャツカへ飛び去るというが、それは事実で、カムチャツカには夏季にはたくさん鷺がいる。カムチャツカ半島の川にはたくさん魚がいて、鷺に豊富な食料を供給している。

このことはオオワシなどの海ワシがカムチャツカで夏を過ごし、冬に千島列島に渡っていたことを示唆している。

既に述べた通り、南千島の国後場所や択捉場所ではオオワシ・オジロワシの尾羽が産出された。しかし、国後島におけるワシの狩猟数に関する史料は現時点で確認できていないため、オジロワシ・オオワシがそれぞれどの程度生息していたのか不明である。ここでは、ワシの狩猟数に関する史料が残る択捉島における具体的な生息状況をみていく。

まず、安政三（1856）年の択捉島でのワシ羽の産出数を記した史料として、「村方よりの軽物納書控」[33] がある。この控によると、「真羽」32 尻、「薄氷」2 尻、「粕尾」3 尻、「白尾」1 尻、「ホロ」760 本が産出されている。つまり、オオワシ 32 羽、オジロワシ 6 羽と 2 種の海ワシの風切羽 760 本である（表 3）。択捉島でもワシ猟は冬期に行われていたため、狩猟数や狩猟場は越冬期の状況を反映していると考えられる。したがって、冬期の択捉島にはオオワシが多く、オジロワシの生息数は少なかったと考えられる。

表3 村ごとの猟場の数とオジロワシ・オオワシの狩猟数

村名	ナイホ	ルベツ	シャナ	ベトブ	ヲトイマウシ	シベトロ	計
オオワシ狩猟数(尻)	2	1	3	7	2	18	33
オジロワシ狩猟数(尻)	1	1		1		2	5
猟場数(ヶ所)	3(1)	12	4	8	2	18	47(45)

択捉島を訪れた山崎半蔵が著した『山崎半蔵日誌』[14]には、「鷺は十四枚尾の大鳥許にて十二枚尾なし」と記されている。この記述がある巻之五は、文化二(1805)年五月十三日から文化三(1806)年四月二十七日までを記したものであると考えられている(吉原2016:128)。この記述だけでは、一年を通じたワシの生息を示しているのか、冬期に獲られる産物としてのワシについて言及したものであるのかは分からない。しかし、いずれの場合であっても、冬期の択捉島にはオオワシが多くオジロワシはほとんど生息していなかったと言える。したがって、これらの記述から1800年頃から1855年頃の江戸時代後期を通じて、冬期の択捉島にはオオワシが多く、オジロワシが少ない状況が続いていた可能性が高い。

『熱多羅抄談』[15]には、「鷺」の択捉島での生息地について「此島ニハ鷺多ク、处在島第一ナリト。然レトモ夷人住居ノ海岸ニハ多ク不来。只山中ニ飛翔セリト」と記されている。つまり、この記述からは択捉島の海岸部にはあまり生息せず内陸部に飛翔していた様子が読み取れる。

このような島内の生息状況をうかがわせる史料として安政三(1856)年の「エトロフ場所軽物鷺尾取獲場所書」[34]がある。この史料には、ワシの猟場として、島の南西部からナイホアンコロ⁹⁾付3(1)ヶ所¹⁰⁾、ルベツアンコロ付12ヶ所¹¹⁾、シャナアンコロ付4ヶ所、ベトブアンコロ付8ヶ所、ヲトイマウシアンコロ付2ヶ所、シベトロアンコロ付18ヶ所の計47(45)ヶ所が記載される(表3)。これらの猟場がある場所を示したのが図6である。猟場があった場所は、近年の択捉島で越冬期にオジロワシ・オオワシが多く生息していた場所と概ね一致する(図7)。このことから、「エトロフ場所軽物鷺尾取獲場所書」[34]が作成された1856年時点と現在の主要な生息場所を比較すると、その生息場所は大きく変化していないと推測できる。

「村方よりの軽物納書控」[33]によると、全ての猟場を合わせてオオワシ33羽、オジロワシ5羽が納められている。すべての猟場で獲られたワシのうち、オオワシの割合は約86%である。マステロフ(2011:92-93)は、越冬期での択捉島でみられたワシのうちオオワシは80%から90%を占めていたと述べており、その割合が一致する。したがって、越冬期の生息場所と同様にオジロワシとオオワシの比率は大きく変化していないと推測できる。

択捉場所と道東におけるワシ羽の狩猟数の違いに着目すると、択捉場所でのワシ羽の産出は「真羽」つまりオオワシが8割以上を占める一方で、根室場所では、オオワシの尾羽は1割から4割と少ない。ただし、数量的には、道東の方がオオワシを多く産出している。しかし、明治時代に入ると択捉島では年間数百羽単位でワシが乱獲されていたことから(多羅尾1893:60)、江戸時代においても択捉島にはワシが多く生息していたと推測されるため、当時の狩猟数の差異は生息数の差異を必ずしも示すものではないと考えられる。

9) 永田(1984:200)によると、鉤にて鷺を捕ることを「アンコロ」と呼ぶ。

10) 合計で3ヶ所としているが書きあげられた猟場の名称は1ヶ所のみ。

11) なお、各村の猟場1ヶ所あたり、1羽程度のワシが産出されているが、ルベツでは猟場12ヶ所あたり2羽のワシしか獲れていない。環境的な要因か人為的な要因かは不明だが、この年のルベツでは平年より狩猟数が少なかった可能性がある。



図6 「エトロフ場所軽物鷲尾取獲場所書」[34]に記載のあった猟場を管理する村（図は鹿能（1976）の地図や地名を参考に作成）

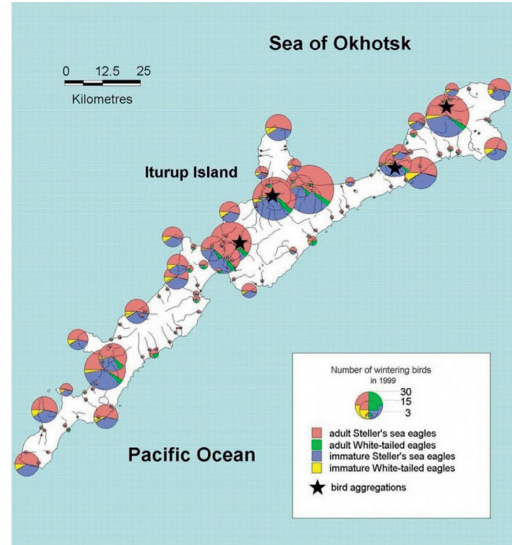


図7 近年の択捉島で越冬するオジロワシ・オオワシの分布（マステロフ（2011：92）より引用）

6. おわりに

本稿では、江戸時代の歴史資料を用いて、当時の北海道・千島・樺太における海ワシの分布の傾向と、道東および択捉島における生息状況を明らかにした。

江戸時代の博物誌・矢羽・北海道に関する史料に記録されたワシの名称と現在の種の対応関係を明らかにし、その結果に基づいて、海ワシの生息記録という観点から記録の整理を行った。その結果、江戸時代の北海道の全域から「鷲」に関する記録が確認できたことから、道内には幅広くワシが分布しており、特に河川周辺が重要な生息地だったと考えられる。オオワシに関する記録は道東や千島、石狩、道北などで確認できたが、なかでも道東や千島における記録が多く、これらの地域に多数生息していたと推測できる。

道東の内陸部の河川では相当数のオジロワシとオオワシが獲られており、その狩猟数からオジロワシは現在よりも多くの個体が越冬していたと推測された。つまり、江戸時代には道東の内陸部の河川に遡上するサケが、海ワシの自然餌資源として重要な役割を果たしていたといえる。したがって、自然状態における海ワシの長期的かつ安定的な存続のためには、現在行われている事故対策に加えて、道東の河川に遡上するサケを増やすことが極めて重要である。一方で、根室場所では乱獲によりサケの遡上数が減少したと思われる1850年代に、オジロワシの狩猟数も減少がみられ、道東へのオジロワシの越冬数が減少していた可能性が示唆された。明治時代以降の開発が海ワシの生息に与えた影響の大きさを把握することはもちろん重要であるが、江戸時代後期にすでにオジロワシの減少傾向がみられることから、より長期的に分布の変遷を把握したうえで保全を進める必要がある。

北千島では、道東よりも数量的に多くのオオワシが狩猟されていたと思われる。択捉島では、オオワシの狩猟数は数量的には道東よりも少ないが、割合としては多いことなどから、オオワシが多数生息していたと考えられる。ワシ猟に関する記録からは、択捉島における海ワシの生息場所および、海ワシ全体の生息数に占めるオジロワシとオオワシの比率は、現在と大きく変わらないと推測

できる。したがって、択捉島では海ワシにとって良好な自然状態が一定程度維持されている可能性が高いと推察される。

本稿では、狩猟の記録から越冬個体数を推測したが、その全容を把握するには至らなかった。内陸部の河川におけるワシの狩猟数のみから、その越冬個体数を把握するのは困難であり、今後は海岸での目撃記録などを合わせて評価する必要がある。また、本州へのワシ羽の流通数など、別のアプローチを用いることも有用である。

さらに、明治時代からオオワシ・オジロワシの生息調査が本格的に始める1980年以前までのワシの分布の変遷を明らかにすることも今後の課題として挙げられる。本稿で扱った江戸時代を含めて、現代に至るまでに分布や生息状況がどのように変化したのか把握したうえで、オジロワシ・オオワシを保全するために目指すべき「自然状態」を適切に設定していく必要がある。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、多くの方々にご教示やご協力をいただきました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

北海道大学大学院文学研究院・久井貴世准教授、佐々木亨教授には様々な面でご指導・ご教示をいただきました。北海道大学大学院文学研究院・谷本晃久教授には日頃よりご指導をいただくとともに文献や資料のご紹介をいただきました。心より感謝申し上げます。

北海道大学大学院文学研究院・専門研究員の梅木佳代氏、北海道大学博物館学研究室修士生の山本晶絵氏には、江戸時代の鳥類図譜の読解など様々な面でご教示いただきました。本稿の土台となった日本鳥学会での発表の際には、認定NPO法人バードリサーチの黒沢令子氏、NPO法人EnVision環境保全事務所の長谷川理氏、シマフクロウ環境研究会の竹中健氏、羽簾研究家の下坂玉起氏、東京農業大学・白木彩子准教授をはじめ多くの方々からご助言や情報提供をいただきました。ご助言をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

エデュエンス・フィールド・プロダクション（EFP）の米川洋氏、日本イヌワシ研究会副会長の高橋誠氏、北海道クマタカ研究グループの石田裕一氏にはイヌワシに関する史資料をご紹介いただくとともに、イヌワシの同定に関して貴重なご意見をいただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。2名の匿名の査読者の方々には、多くの有意義なご意見をいただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 秋葉実（解説）（1985）『戊午東西蝦夷山川取調日誌』上・中・下。北海道出版企画センター，札幌。
秋葉実（編）（1991）『北方史史料集成』第1巻。北海道出版企画センター，札幌。
秋葉実（編）（1997）『松浦武四郎選集』2。北海道出版企画センター，札幌。
秋葉実（編）（2007）『松浦武四郎選集』5。北海道出版企画センター，札幌。
東俊佑（2021）「北蝦夷地ウシヨロ場所アイヌの軽物上納」『北海道博物館研究紀要』6：11-50。
厚岸町史編集委員会（編）（2016）『新厚岸町史』資料編4諸記録。厚岸町，厚岸。
天野哲也・藤井幹（2023）「鎌倉鶴岡八幡宮「黒漆矢」矢羽の産地」『北海道考古学会』59：39-49。
坂板耀子（編）（2002）『近世紀行文集』第1巻蝦夷篇。葦書房，福岡。
稲葉一郎（解説）（1992）『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』北海道出版企画センター，札幌。
植田睦之・小板正俊・福井和二（1999）「秋期のオオワシとオジロワシの分布に影響する要因」『Strix』

17: 25-29.

大友喜作(編)(1972)『北門叢書』第1冊. 国書刊行会, 東京.

小川昭一郎(2006)「史料翻刻①産物類, 軽物小皮, 熊膽皮関連記事」『道都大学紀要』31: 1-70.

オジロワシ・オオワシ合同調査グループ事務局(1982)『オジロワシ・オオワシ一斉調査報告書』根室郷土研究会, 斜里.

風間辰夫・土田崇重(2018)「日本産鳥類 308 種と外国産鳥類 201 種の尾羽の枚数について」『鳥類標識誌』30: 80-106.

鹿能辰雄(1976)『北方風土記 択捉島地名探索行』みやま書房, 札幌.

河井大輔(1995)「北の山鷲 北海道のイヌワシを追って」『RISE』5: 61-72.

河井大輔(2006)「アイヌ民族は鷲をどう見ていたか」『Faura』14: 31.

環境省(2014)「平成 25 年度風力発電施設に係る渡り鳥・海ワシ類の情報整備委託業務報告書」環境省, 東京.

環境省(2021)「オジロワシの概要」<https://hokkaido.env.go.jp/ojirowashinogaiyou2020/ojirowashinogaiyou2020.pdf> (2024 年 6 月 13 日最終閲覧)

菊池勇夫(1993)「鷲羽と北方交易」『キリスト教文化研究所研究年報 民族と宗教』27: 25-49.

齊藤慶輔(2018)「北海道における希少猛禽類の事故と環境治療」『Biostory』30: 56-63.

札幌市教育委員会(編)(1987)『新札幌市史』第六巻史料編 1. 札幌市, 札幌.

澤井玄(2008)「11~12 世紀の捺文人は何をめざしたか—捺文文化の分布域拡大の要因—」榎森進ほか(編)『アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として—』217-246. 岩田書院, 東京.

白木彩子(1999)「オジロワシ」斜里町立知床博物館(編)『しれとこライブラリー 1 知床の鳥類』126-177. 斜里町・斜里町教育委員会, 斜里.

白木彩子(2009)「オジロワシの生息実態と保全の方向性」『ワイルドライフ・フォーラム』14(2): 6-8.

白木彩子(2017)「オジロワシの生態と保護—北海道で繁殖するオジロワシの生息状況と保全について—」『知床博物館研究報告』39: 99-101.

知床町立知床博物館(1990)『オジロワシとオオワシ』知床町立知床博物館, 斜里.

菅原浩・柿澤亮三(1993)『図説 日本鳥名由来辞典』柏書房, 東京.

鈴木敬三(編)(1996)『有職故実大辞典』吉川弘文館, 東京.

瀬尾石根(1940)「矢羽」長坂金雄(編)『弓道講座』第 16 巻. 1-44. 雄山閣, 東京.

瀬川拓郎(2007)『アイヌの歴史 海と宝のノマド』講談社, 東京.

高倉新一郎ほか(編)(1969)『日本庶民生活史料集成』第 4 巻. 三一書房, 東京.

高倉新一郎(編)(1982)『犀川会資料』北海道出版企画センター, 札幌.

高瀬光永(2002)「北方地域の鳥獣について—近世北海道のワシ類を中心として—」『溯航』20: 76-96.

多羅尾忠郎(1893)『千島探検實紀』鹿田書店, 大阪.

徳力真太郎(訳)(1994)『南千島探検始末記』同時代社, 東京.

外山雅大・松本潤慶(2019)「別当賀川におけるシロザケ後期群の遡上状況とその消費者について—特にオオワシ・オジロワシに注目して—」『根室市歴史と自然の資料館紀要』31: 69-78.

中川元(1999)「オオワシ」斜里町立知床博物館(編)『しれとこライブラリー 1 知床の鳥類』178-219. 斜里町・斜里町教育委員会, 斜里.

- 中川元 (2009) 「オオワシ」『Bird Research News』6(2): 2-3.
- 中川元 (2013) 「日露共同オオワシ・オジロワシ調査の成果と北海道の越冬状況」桜井泰憲ほか(編)『オホーツクの生態系とその保全』281-289. 北海道大学出版会, 札幌.
- 長澤政之 (2005) 『近世蝦夷地, 場所請負制下のアイヌ社会—東蝦夷地, 子モロ場所の事例を通じて—』東北学院大学大学院文学研究科 (博士課程学位論文)
- 永田方正 (1984) 『北海道蝦夷語地名解 (復刻版)』草風館, 東京.
- 西川北洋 (著) (1941) 『アイヌ風俗繪巻: 天然生活と資源の活用』トミヤ出版部, 旭川.
- 日本鳥学会 (2012) 『日本鳥類目録』改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 長谷川充 (2006) 「シマフクロウとアイヌ民族: アイヌの人びとはシマフクロウとどのように関わってきたか」『(財)アイヌ文化振興・研究推進機構 平成18年度普及啓発セミナー講演録』74-80.
- 早矢仕有子 (1999) 「北海道におけるシマフクロウの分布の変遷—主に標本資料からの考察—」『山階鳥研報』31: 45-61.
- 久井貴世 (2013) 「江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定: タンチョウに係る名称の再考察」『山階鳥学誌』45: 9-38.
- 久井貴世 (2014) 「江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定: マナヅル・ナベヅルに係る名称の再考察」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』14: 55-80.
- 久井貴世 (2016) 『江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり』北海道大学 (博士課程学位論文)
- 久水俊和 (2024) 「室町期京都とエゾ地—北方交易品の消費地 (都) と供給地 (鄙) からみた都鄙関係試論—」『追手門学院大学人文学紀要』2: 60-84.
- 藤巻裕蔵 (2012) 『北海道鳥類目録』改訂4版. 極東鳥類研究会, 美唄.
- 平凡社地方資料センター (編) (2003) 『北海道の地名』平凡社, 東京.
- 北海道 (編) (1969) 『新北海道史』第7巻. 北海道, 札幌.
- 北海道水産部漁業調整課・北海道漁業制度改革記念事業協会 (編) 『北海道漁業史』北海道水産部, 札幌.
- 前田琢 (1996) 「生態系の保全」樋口広芳 (編) 『保全生物学』71-102. 東京大学出版会, 東京.
- マステロフ V. (2011) 「オオワシ個体群の現状」『オホーツク生態系保全日露協力シンポジウム報告書』91-97.
- 松尾牧則 (2003) 「日本の矢と矢羽文様について—『矢羽文考』—」『国際武道大学研究紀要』19: 131-148.
- 松前町史編集室 (編) (1974) 『松前町史』史料編第1巻. 松前町, 松前.
- 松前町史編集室 (編) (1979) 『松前町史』史料編第3巻. 松前町, 松前.
- 南鉄蔵 (1976) 『北海道総合経済史』国書刊行会, 東京.
- 蓑島栄紀 (2015) 『「もの」と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ—』勉誠出版, 東京.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1995) 『図鑑日本のワシタカ類』文一総合出版, 東京.
- 文部科学省・農林水産省・国土交通省・環境省 (2005a) 「オジロワシ保護増殖事業計画」
<https://hokkaido.env.go.jp/content/000070324.pdf> (2024年6月13日最終閲覧)
- 文部科学省・農林水産省・国土交通省・環境省 (2005b) 「オオワシ保護増殖事業計画」
<https://hokkaido.env.go.jp/content/000070325.pdf> (2024年6月13日最終閲覧)

山崎健 (2015) 「古代における鷲羽の利用」『奈良文化財研究所紀要』2015 : 72-73.

吉原裕 (翻刻) (2016) 『改訂宗谷詰合山崎半蔵日誌』吉原裕, 発行地不明.

Lerner, Heather R. L. & Mindel, David P. (2005) 「Phylogeny of eagles, Old World vultures, and other Accipitridae based on nuclear and mitochondrial DNA」『Molecular Phylogenetics and Evolution』37: 327-346.

Distribution of eagle records and habitat status of eagles in Hokkaido, Sakhalin and the Kuril Islands during the Edo period

Keigo IKEDA

(Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

The purpose of this paper is to clarify distribution of eagle records and habitat status of eagles in Hokkaido, Sakhalin and the Kuril Islands during the Edo period by investigating historical records.

First, this paper identified correspondence between the current species of eagle and their historical names by examining natural history documents, records related to arrow feathers, and historical documents related to Hokkaido in the Edo period. Second, based on the results, the records were organized in terms of eagle habitat records. As a result, it was estimated that during the Edo period, eagles were widely distributed along the coasts of the Sea of Japan, the Pacific Ocean, and the Sea of Okhotsk, and were particularly abundant in the eastern part of Hokkaido and the Kuril Islands. However, in the east of Hokkaido, there was a decline in the number of White-tailed eagles hunted in the 1850s. This paper suggested that overfishing has reduced the number of salmon runs, the primary food source for sea eagles, which may have contributed to the decline of white-tailed eagles. This means that increasing the number of salmon migrating up rivers in the Eastern Hokkaido region is crucial for the long-term and stable survival of sea eagles in their natural state. And it is clarified that proportion of White-tailed and Steller's sea eagles on Iturup Island during the wintering season as well as their habitat on the island has remained largely unchanged since the Edo period.

The habitat status of sea eagles during the Edo period showed in this paper serves as valuable historical background for establishing an appropriate "natural state" necessary for the conservation of sea eagles. In the future study, it will be necessary to clarify the changes in distribution of eagles after the Meiji Era.

